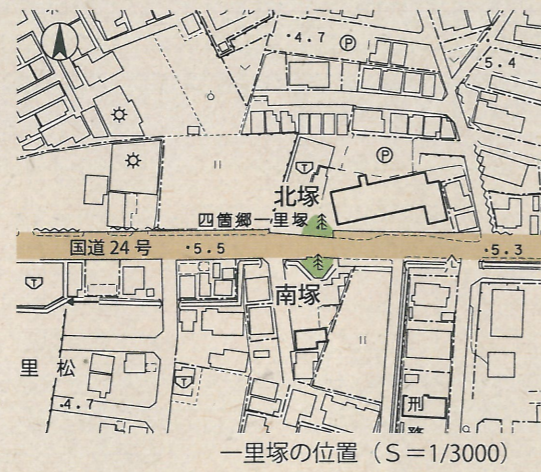


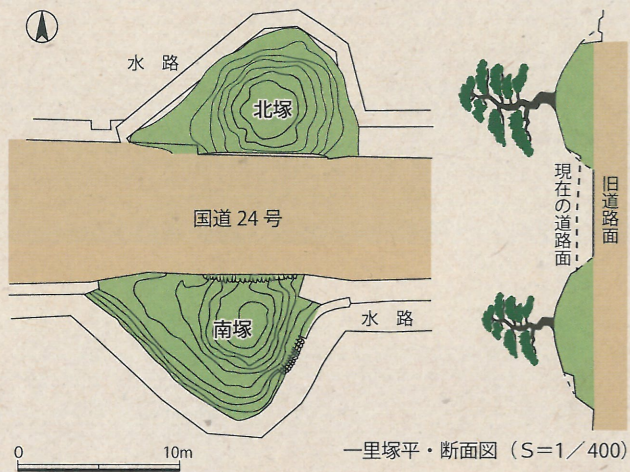
# 四箇郷一里塚とは

四箇郷一里塚は和歌山市新在家にある近世の交通遺跡です。一里塚は和歌山城の外堀（現在の市堀川）にかかる京橋を起点として、1里（約4km）ごとに旅行者に移動距離を示す目印として街道の両脇につくられました。四箇郷一里塚は京橋から最初に通る一里塚になります。現在も北塚と南塚が良好に残っており、昭和15年（1940）に国の史跡に指定されました。史跡指定時の松は、北塚が昭和54年（1979）、南塚が昭和59年（1984）に植え替えられました。抜き取った松の年輪を調べた結果、江戸時代にも何度か植え替えられていたことが分かりました。



## 一里塚の大きさと道幅

四箇郷一里塚の大きさは、北塚・南塚とも直径約10mあり、高さは南塚が2.2m、北塚が2.5mあります。国道24号をつくる際、周囲に盛土がおこなわれており、現在は0.7mほどが道路の下に埋まっています。そのため、当時は今確認できるよりも大きな塚でした。また、北塚と南塚との距離を測ると6~7mで、当時の街道の道幅と推測されます。本町御門から嘉家作丁までは道幅約12m、さらに東に曲がった嘉家作丁片町からは松並木に沿って約9mの道路幅があったとされているため、同じ街道でも城下町から離れると道路幅も狭くなっていたようです。



# 参勤交代と一里塚



「徳川斉順帰国行列図」和歌山県立博物館蔵

江戸時代におこなわれた参勤交代は、原則として一年おきに、諸大名を江戸と領地とに居住させる制度で、寛永12年（1635）に制度化されました。紀州藩は御三家と呼ばれた特別な藩でしたが、初代頼宣は49年間に20往復、第2代光貞は38年間に19往復するなど、他の大名と同様に参勤交代が課されていました。そのため、和歌山でも街道が整備され、八軒屋、山口などの宿場も発達しました。参勤交代の経路は第6代の宗直までは大和街道～伊勢街道～川俣街道～東海道、それ以降は、上方街道～東海道のルートを主に使用していました。藩主が参勤交代で江戸に旅立つ際には、藩士たちは四箇郷の一里塚で一行を見送り、江戸から帰国する時もここで出迎えたとされており、四箇郷一里塚は参勤交代時の目印としても使用されていました。

# 国指定史跡 四箇郷一里塚



現代の四箇郷一里塚 (南から)



とくがわりゆき 第11代藩主徳川斉順の帰国の様子



昭和40年頃の四箇郷一里塚 (西から)

## 四箇郷一里塚の沿革

- 昭和15年(1940) 国の史跡に指定
- 昭和28年(1953) 和歌山市が管理団体になる
- 昭和54年(1979) 北塚の松の植え替え
- 昭和59年(1984) 南塚の松の植え替え
- 平成5年(1993) 北・南塚の松の植え替え

**交通案内**  
 バス 南海和歌山市駅より橋本駅前行き (約16分) →四ヶ郷下車すぐ  
 電車 JR 紀伊中ノ島駅下車→徒歩15分

**文化庁**  
 AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS  
 このリーフレットは平成25年度「地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業」の補助金を受けて作成しています。

# 大和・上方街道と一里塚

四箇郷一里塚を通る主な街道として、上方街道(大阪方面)と大和街道(奈良方面)があります。共に京橋を起点に、本町御門に至り、嘉家作丁より紀ノ川堤防を東に進み八軒屋の先で分かれています。上方街道はそこから田井ノ瀬の渡しを渡り、山口に至り、雄山峠を越えて和泉へ入ります。大和街道はそのまま船戸まで直進し、岩出の渡しを渡り、大和へ向かいます。元和5年(1619)、徳川頼宣が入国して、これらの街道が整備されました。嘉家作丁から八軒屋の間には街道の両脇に松並木が植えられ、四箇郷には一里塚がつくられました。



江戸時代の街道

## ① 京橋

絵図の左側が京橋御門でそれより内側は和歌山城内になるため、一般の人は通行できません。そのため、この京橋が上方・大和街道の起点となりました。



京橋 (東から)

## ② 本町御門・嘉家作

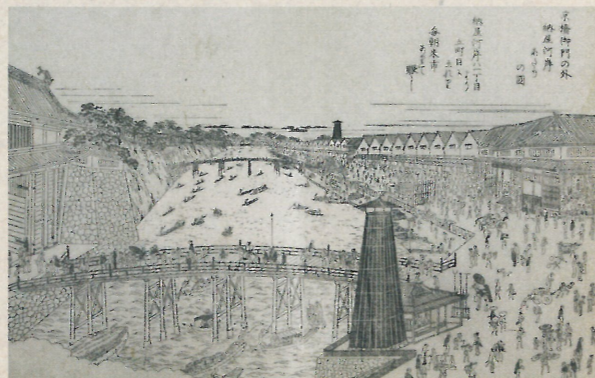
浅野期(1600~1619年)に和歌山城の大手門が岡口門から一の橋御門に移されると本町御門が城下への入り口になりました。その門前付近の、新しく築かれた紀ノ川堤防の南側には、家が建ち並びました。これらの家は堤防の斜面に家を「懸け」て建てた珍しい建て方で、その建て方から現在の町名がついたと伝えられています。現在も古い町並みが残されており、城下町の面影が感じられます。



嘉家作丁 (北西から)

## ③ 地蔵の辻

嘉家作丁からを東に進むと地蔵の辻があります。古くから大和街道と大坂街道が合流する交通の要衝で、その辻には地蔵堂がありました。そのため、地蔵の辻と呼ばれるようになったと伝えられています。紀伊国名所図会には堤防に植えられた松や、十字路に露天店が立ち並ぶ風景が描かれており、当時の街道の様子がよく分かります。



京橋御門と京橋



本町御門



地蔵尊



地蔵の辻

# 街道と紀伊国名所図会

## ④ 八軒屋～田井ノ瀬の渡し

四箇郷一里塚を通り、八軒屋で上方街道は田井ノ瀬の渡しを渡ります。八軒屋は城下に住む人が旅に出る人を見送る場所であったため、旅館や茶店が多く、商人宿もありました。現在、田井ノ瀬の渡しの位置は分かりませんが、南田井ノ瀬橋の付近と伝えられています。江戸時代には紀ノ川にかかる橋は1本もなく、紀ノ川間の連絡はすべて渡し舟を使っていました。紀ノ川下流の渡し場としては、田井ノ瀬の渡しのほかに川辺、六十谷、園部、宇治、西北島に渡しがありました。田井ノ瀬の渡しは参勤交代の際にも使用されるなど重要な場所でした。



紀ノ川の渡し



八軒屋の街道 (西から)



田井ノ瀬の渡し付近 (南西から)

## ⑤ 山口御殿

上方街道は田井ノ瀬の渡しから永穂、そして川辺を通り、里の集落に入ります。当時街道沿いには宿場が立ち並んでおり、現在もその面影が残っています。また、現在の山口小学校のほぼ同じ敷地に、参勤交代における歴代藩主の出入国や、幕府の使者が入国する際に休憩所として頻りに利用されていたとされる山口御殿がありました。

山口御殿は、中世の喜内氏の旧宅を徳川家が別邸として利用するために改築した建物です。東西と南北にそれぞれ約100mの敷地があり、敷地の周りを堀で防備していた様子が紀伊国名所図会にも描かれています。現在は小学校校庭の隅に山口御殿の堀にかかっていた石橋が残っており、紀伊国名所図会にもこれとよく似た石橋が描かれています。



山口御殿と街道



山口御殿の石橋



山口の街道 (北から)

## ⑥ 雄山峠

山口をでると雄山峠を越えて和泉の山中宿へ向かいます。雄山峠は標高181mあり、平安時代には熊野街道として利用されるなど、紀伊国と和泉国との間の峠越えのなかでも古代から重要な交通路でした。



雄山峠と街道 (北から)



雄山峠遠景